

「高岡市デザイン・工芸センター」

新クラフト産業・

Takaoka Design Movement

4

デザインを育成し 高岡ブランドの 確立を支援する

地元産業界やクラフトマン、デザイナーの期待を一身に担って、高岡市デザイン・工芸センターがオープンした。同センターは「新クラフト産業・デザインの育成」、「伝統工芸の保存・継承」、「デザインや工芸の啓発・普及」を活動の三本柱とするが、オープン以来の活動を交えながら、その内容を紹介する。

平成十一年九月二日、高岡市デザイン・工芸センター（以下、デザイン・工芸センターと略）がオープンした。同センターは、伝統工芸産業が培ってきた技術や技法を守りつつも、時代を反映した新クラフト製品がつくれ、それが産業へと発展するよう支援することを目的に設立されたもの。第三セクター方式の富山県産業高度化センター、富山県総合デザインセンターと

ともに一体的に建設されてサン・センター(Sun Center)を形成し、高岡市戸出地区のオフィスパークの一角に誕生した。

ものづくりを支援する拠点として
企業やクラフトマンに情報を発信

竣工式の翌日から、サン・センター一階展示室において「ニュークラフト展」が催された(九月

三日〜二十六日)。この展示会は、一九八六年から「工芸都市高岡クラフトコンペティション」を実施してきた高岡市のデザインプロモーションの成果の一端を示すものといえる。

同コンペは、もの(ものづくり)を通して新たな潮流をビジュアルに提示し、伝統工芸産業に新しい動きを誘発するために企画されたもの。コンペを契機として、高岡に蓄積されている多種多彩な技術と、職人のスキルの高さにデザイナーやクリエイターが触発され、また伝統工芸産業の関係者も消費者ニーズに目を向け始めたのである。

こうした中で、デザイナーやクリエイターと(地元企業とのコラボレーション(共同作業)が生まれ、彼らの新鮮で自由な発想と、デザインという視点からのアプローチによって、今という時代にマッチした新クラフトが誕生してきた。またこのコラボレーションを通して、地元企業は高岡の潜在的なもののづくりの能力を再発見するとともに、デザイン開発の重要性を認識。さらには、市場の創造を視野に入れたトータルなものづくりの必要性も実感するようになった。

この意識改革の過程で生まれたのが、デザインマインドにあふれた新クラフトの数々。「ニュークラフト展」では、素材の可能性を引き出すことを試みるデザイナーと地元企業のコラボレーションから生まれた黒川雅之さんのクロック、趙慶姫さんの香立て、澄川伸一さんの漆のコーヒーターブル「一輪」をはじめとする一六九点の作品が展示された。

また、竣工式があった九月二日の夕方には、オープニング記念イベントとして黒川雅之さん(建築家・プロダクトデザイナー)を講師に招いてのスタディートーク&フォーラムを開催。「高岡の21世紀を考える」21世紀はどうなるか、高岡

の未来への提言」のテーマのもと、黒川さんは高岡の伝統工芸産業の復興、新クラフト産業興隆のためには、「生産者、流通業者、デザイナー、行政などが協力して生産開発をする」、「生産者自身が直販もする体制を確立する」、「市場を拡大するために観光開発を進める」の三つに取り組みなければならぬと提案された。(二頁〜コラム①参照)



ニュークラフト展



メイド・イン高岡セクション展

そして、二カ月後の十一月十二日に「21世紀国際フォーラム―高岡ワークショップ」が催された。フォーラムでは、「写ルンです」の企画開発に携わった田中央さん・田中デザインオフィス代表が「もうひとつの、デザイン―次世代に求められる。ミレニアムデザイン」と題して講演。その後、蠟山昌一さん(国立高岡短期大学学長)、坂下清さん(武蔵野美術大学教授)、黒川玲さん(建築家・プランナー)を交えてのパネルディスカッションが持たれた。(三頁〜コラム②参照)



サン・センター(Sun Center)の外観

さらには十一月十八日、荻野克彦さん(プロダクトデザイナー・荻野克彦デザイン事務所代表)を講師に招いてのデザインセミナーが企画され、「アサヒビールと日産の差」を地場産業



高岡再生のために黒川雅之さんが提案された「一歩目は「生産開発に取り組み」と」。日本の産業はかつてはメーカーが「シニアチーフ」を取り、次いで流通が台頭してきた。ところが今日では消費者が主人公になっており、必要性を感じない消費者にいくら販促プロモーションをかけても無理ではないか。そこでメーカー(生産者)や流通業、デザイナーがトライアングルを組んで、その真ん中に行政や研究機関を置く。これらが連携をとりながら、「この町でものをづくり(生産)、それを買

高岡再生のために黒川雅之さんが提案された「一歩目は「生産開発に取り組み」と」。日本の産業はかつてはメーカーが「シニアチーフ」を取り、次いで流通が台頭してきた。ところが今日では消費者が主人公になっており、必要性を感じない消費者にいくら販促プロモーションをかけても無理ではないか。そこでメーカー(生産者)や流通業、デザイナーがトライアングルを組んで、その真ん中に行政や研究機関を置く。これらが連携をとりながら、「この町でものをづくり(生産)、それを買



当センターは、基本的には産業業務支援施設です。高岡には銅器を中心とした金属加工の企業が多く、また漆器産業も根強く生きています。各企業では独自の商品開発をしていますが、例えばある社員が「別な角度から商品開発を試したい」という時、勤務時間や設備の制約などがあり、その希望が叶わない場合もあるでしょう。そこで当センターは土・日曜日も開け、積極的に創作活動を展開してもらおうとしています。

また、一般市民の方々に伝統産業やデザインについて慣れ親しんでいただくために、各種の工芸体験実習も企画しています。伝統工芸を身近に感じていただくことは、潜在需要の掘り起こしに役立ちます。指導に当たる職人さんと一般市民を結びつけることにより、既存商品の改良や新製品開発の糸口ともなるのではないかと考えています。

コストダウンの波に没々とするだけでは、伝統工芸の産地はいずれ危機に瀕してしまいます。でも、時代がどんなに変わろうとも、手づくりの風合いを求めている人がいるので

く誕生させようとしている。

ものづくりの町・高岡の文化を守りデザインや工芸を啓発・普及する

もともと高岡市には、ものづくりを支援する気風が満ちている。それは四〇〇年前の、加賀藩二代藩主・前田利長公の銅器・漆器を中心とする殖産興業政策に端を発しているが、支援機関としては明治四十二年に設けられた高岡物産陳列所がその始まり。以来、時代の状況に即応して事業の見直しや組織の改編を行い、前身

の立場から考える」の演題のもと講演していただいた。(五頁「コラム」参照)

これらのフォーラムやセミナーは、新クラフト産業やデザイナー、クラフトマンを支援するためのもの。クラフト産業やデザインの方向性、将来性、可能性などの貴重な情報を得るばかりでなく、それを契機として聴講者自身が探究するということ、ある意味では問題提起の場となっている。また、こうした機会を通して高岡のリソース(資源)や伝統を創造的にとらえ直し、素材と技術とデザインによって開拓する新クラフト産業の育成を目指すというのである。

エコロジーやリサイクル対策のため鉛レス銅合金素材の開発を目指す

デザイン・工芸センターでは、新素材の開発や複合素材による商品開発の支援などにも取り組んでいる。新しい素材の開発として平成十一年度にテーマとしたのが、銅合金における鉛の排除。すなわち「鉛レス」の開発である。

鉛は融点が低く、加工性にも優れているため電子基板のハンダづけや合金メッキなどで使われ、その用途の幅が広い。ところが、破棄された製品が酸性雨にさらされると鉛が溶け出す危険性があり、それが環境や人の健康に悪影響をもたらしかねないことが明らかになった。そのため、家電メーカーなどではハンダづけの際、鉛を使わない研究を本格化させている。

高岡市においても、いち早く鉛レス銅合金素材の開発に取り組んだ。前述のように人の健康への配慮のため、また関心が高まりつつあるエコロジーやリサイクルの問題に対応するため、平成十一年七月、デザイン・工芸センターの呼びかけにより「鉛レス素材開発研究会」が発足。高岡銅器業界の鑄造、地金、着色などの一

四社が集まり、鉛を含まない銅合金開発のための実験が、デザイン・工芸センターの鑄造場において開始された。

今のところ、美術銅器の鉛規制の動きはない。しかし、対策を講じることなく問題が大きくなるまで放置しておく、イメージダウンは免れないだろう。だから問題が起こる前に、鉛を使わなくても加工等がしやすい銅合金素材の開発をテーマにしたのである。(実験の概要は一五頁参照)

一方、複合素材による商品開発にも新たな動きが出てきた。伝統工芸高岡銅器振興協同組合と志村雄逸さんのコラボレーションによる「キネティック・ライト・アート」という動く明かりシリーズは、素材のアルミ鑄物は高岡、和紙は八尾、ステンレスは東京や千葉、光ファイバーは栃木、そしてメカは東京や埼玉と、各地の素材により構成されている。同協同組合では、他素材との融合、ことに光ファイバーや電子基板というハイテク技術と鑄物や和紙の伝統的な素材が織りなす新クラフト感覚の照明器具を評価し、商品化も決定している。

またデザイン・工芸センターでは、金属とガラスの新しい融合を試みるために富山ガラス工房とのコラボレーションも開始した。ガラスを溶かす段階から金属と融合させるための実験などに取り組み、さらには他産地との技術の融合も計画中である。

伝統工芸といえども、イノベーション(技術革新)を繰り返してきた。数百年の間、同じ素材や技術でものをつくってきたわけではなく、常に工夫や改良が試みられてきている。デザイン・工芸センターではそれをさらに積極的に支援し、新素材の開発や複合素材・複合技術の組み合わせにより、今を生きる新クラフト製品を多

の高岡市工芸デザイン指導所を経て、デザイン・工芸センターへと至った。

同センターには、ガス炉・トランジスタ式高周波炉・鑄造用ミキサー・プラスチックを配備した鑄造場のほかに、回転装置付漆乾燥庫・自動乳鉢・漆工関係道具類を備えた表面処理室、また塗装焼付乾燥機・金工関係工具類がある造形・体験工房などが整っている。これらの設備は、前出のような実験やクラフトマンの創作活動を支援するために使われるほか、「伝統工芸の保存・継承」事業にも効果的に活用されている。

当事業は、工芸デザイン指導所より引き継いだものだが、指導所時代にはなかった鑄造場が整備されたため、鑄物などの技術指導も可能になった。

従って、五八〇人あまりの修了生を輩出してきた「伝統工芸産業技術者養成スクール」は、漆工全般はもちろんのこと、原型づくりから鑄造、仕上げ、着色までの金工の技術指導もでき、内容の充実が図られることはいままでもない(平成十一年度の伝統工芸の保存・継承事業は一六頁に一部紹介)。また、伝統的工芸品の技術・技法を継承する人材の育成事業や、伝統工芸産業技術者指定表彰事業などは、指導所時代と同様に実施していく。

デザイン・工芸センターへの来所者は、指導所時代より格段に増えてきた。講演会やセミナーの聴講のほかに、新素材の開発などの各種実験、クラフト試作、高岡クラフトコンペのグランプリ受賞作品(常設展示の見学やパソコンを活用してのデザインの考案、またライブラリーサロンでのデザイン・工芸関係の専門書(一五〇〇冊収蔵)の閲覧など、さまざまな目的を持って集ってくる。

企画展も冒頭に紹介したもののほかに、高岡



造形・体験工房



表面処理室



鑄造場内のガス炉を利用し、鉛レス銅合金開発に向け実験



鉛レス素材開発研究会

もつと製造のプロセスにユーザーを引き込む努力が必要ではないかと提言。また坂下清さんは「デザインには感性が優先されるが、今後はビジネスマインドやマーケットマインドを持ったデザイナーを育てなければならぬ」と語った。

もう一人のパネリストである黒川玲さんは、「すべてを自分たちの地域でまかなおうとするのではなく、他の地域との交流や技術交流も必要だろう。自分たちの産業や企業を、複数の物差しで測れるような視点も忘れてはならない」と締めくくった。

そして新世紀をつくる「ミレニウムデザイン」は、みんなで考え方をもち寄りつて水平討論する、デモクラシーも含めて行われる。それは「コンセプト」をめぐって、さまざまな「ソリューション」や「ネットワーク」の中で合意を得ることも前提になってくる。個人や組織のバリエーションが取り込まれた中から新しいデザインのビジョンが生まれるだろうと、田中さんは結んだ。

続くパネリストスセッションでは、「企業と地域をデザインする」をめぐって語られるデザイン「役割」のテーマが話し合われたが、黒山昌一さんは銅器の町・高岡は、どこにも銅器工場があるのかわからない。

基調講演に立った田中央さんは、「コデザイン」とは、ある目的に向けて計画を立て、問題解決のための思考概念の組み立てを行い、それを可視的・触覚的触媒によって表現・表示することと定義。「可視的・触覚的触媒」によって表現・表示するためには「イメージ」関係づけという働きが必要であり、この「関係づけ」という働きが「デザイン」の大きな特徴であるという。

また、デザインには「メタファー(暗喩)」「メトニミー(換喩)」「デフォルマシオン(変形)」「トポロジイ(位相位)などの関係づけの手法があるが、そこにデザイナーの感情や考え方をいれたいくと、従来の枠組みを超え、非常識ではなく「異常識」な考え方に至ることもある。異質なものの融合からこそ、創造性に長けた商品が生まれる」と語った。



21世紀国際フォーラム 高岡ワークショップ

漆器の斬新なテーブルウェア群を紹介した「漆器ニューライフ展」、第二次世界大戦時の経済統制下から五〇年にわたるものづくりの足跡をたどる「伝統工芸・高岡ヒストリー展」1940〜1990、ものづくりの町・高岡で生まれたニュークラフト、ニュープロダクトの中から暮らしを彩る商品展示した「メイド・イン高岡セレクション展」などが開催された。これらの展示会には一般市民も見学を訪れ、デザインやクラフトについての啓蒙とともに、古くて新しい町・高岡への認識を深めることに役立っている。

手づくりの価値を再発見し ものづくりの楽しさを啓蒙

また、市民を対象にして開いている銅器や漆器の工芸実習も、デザインや工芸の啓蒙・普及に一役買っている。オープン以来半年間の、工芸実習の制作課題を拾い上げてみると、鋳物のルームプレート、鋳物の日時計、螺鈿を施した石のペーパーウェイト、鋳物のキャンドルスタンド、蒔絵を施した手鏡、蒔絵の雛人形など、どれも身近なものばかり。それも、十二月初めにはクリスマスを意識してキャンドルスタンド、二月には雛人形というように季節感を演出。ほかの時には生活の中で使えるもの、また流行している雑貨の中から銅器や漆器でつくられるものを選んで制作課題にし、市民がものづくりに親しめる工夫と配慮がなされている。

工芸実習の講師を務めている齊藤慎二さん（塗師）と榎間秀人さん（金属工芸デザイナー）に話をうかがった。二人とも「工芸実習は手づくりの価値を再発見するいい機会になっている」と指摘し、齊藤さんは「曲面に線を引くって難しいんです。特に直線は定規を当てるわけでもないから、熟練した技術が要る。それを受講生

のみなさんは自分でやってみて「こんなに難しいんだ」と実感される。銅器でも同じでしょうが、こういう体験を通して、よいものとは何かをわかってもらえると思う」とコメント。

また工房を営むかたわら、金沢美術工芸大学で講師を務める榎間さんは、「市民の工芸実習といつても、子どもの遊びの延長みたいなものだろうと思っています。鋳物の香皿をつくった時も、結局はトレイみたいなものをつくった人が多かったけど、中にはもう一工夫すれば商品化できるかな」という作品もありました。仕事は工芸とかデザインとは関係のない方でしたが、素直に「こんな形のものがあったらいいな」を表現されている。僕にはそれが、いい刺激になります」と実習を振り返って語った。

高岡ブランドの確立を目指して トータルなものづくりを支援する

工芸実習はクラフトマンや職人を刺激し、それがまた創作活動に生かされていく。こうしてみると、新クラフト産業やデザインの育成、伝統工芸の保存・継承、デザインや工芸の啓蒙・普及というデザイン・工芸センターの活動コンセプトは相互に関連し、相乗効果をもたらして高岡ブランドの確立を目指していると言え替えることもできる。

年度末の平成十二年三月八日〜二十日の間には「メイド・イン高岡セレクション展」が催された。同展示会では、地元高岡でつくられたレバーハンドルやキャンドルスタンド、アラームクロック「GoodGo」、スライド門扉、ダブルオープンなど九八点が紹介され、来場者の目を引きつけた。

いずれの商品も、ナショナルブランドに勝るとも劣らないものばかり。斬新なデザインやフ

ォルムが評価されて、通商産業省のグッドデザイン賞には高岡ブランドの商品が数多く選定されている。

としての有意性があると認められたのである。デザイン・工芸センターは、こうした新クラフトが数多く誕生し、それが産業へと発展するのを支援する機関である。新クラフト産業育成のためには、市場ニーズをくみ上げ、エコロジーやリサイクルという環境負荷低減にも取り組まなければならぬ。また時代や地域の要請を見極めたタイムリーなテーマを設定し、新素材の開発や異素材との融合も展開しながら試作モデルの制作を行うことなども必要となってくる。



メイド・イン高岡セレクション展(展示物の一部)

受賞に当たって同シリーズは、アルミ素材の美しさや周辺環境との調和を考慮したトータルなデザイン、アルミのリサイクル性を最大限に生かした構造設計が評価された。特に時計台は太陽電池を採用することによるエコロジーやメンテナンス、ランニングコストなどに配慮したこと、ベンチは座部にリサイクル材の人工木（木粉70%、樹脂30%）を使用してエコロジー対策を図ったこと、街路灯は省エネ性に優れたセラミック発光管・メタルハライドランプを用いてランニングコストの削減に努めたことなどが、公共材

（*1）従来の伝統工芸や美術工芸とは一線を画した、創造的でデザイン性のある雑貨やインテリアなどのクラフト。景観材分野なども含む。産業としての広がりを持つ製品群として、「新クラフト産業」ととらえる。

（*2）賃貸オフィスやインキュベータ室を備え、新規事業に乗りだす企業を支援する機関。

（*3）プロダクトやインテリア、ファッションなどの産業のデザイン振興を図る機関。考案したデザインモデルを制作できるモックアップ工房を備えている。

（*4）高岡市デザイン・工芸センター、富山県産業高度化センター、富山県総合デザインセンターの三つの機関が一体的に建設された建物の愛称。「三つのセンターが地域産業を照らすエネルギー」を太陽になるように」という願いから、この愛称がつけられた。

（*5）キネティック・アートは、動く芸術の意。芸術作品は通常、静的なものであるが、これに動きを加えたものをいう。そこに光の要素を加味したものが、キネティック・ライト・アートである。



アルミ景観材シリーズ「タウンズ・スパイス」時計台、街路灯(三協アルミニウム工業株式会社)



「後りでマイカップをつくらう」の体験実習風景



伝統工芸・高岡ヒストリー展



漆器ニューライフ展



3 デザインセミナー

講師の野野原さんは、アサヒビールと日産自動車という賑しい経営状況を迎えた企業を例に挙げながら大筋、以下のように話を進める。

日産自動車はかつては「技術の日産」と愛着を込めて呼ばれていた。しかし、道路事情がよくなった現代では自動車に求められる技術の内容が変わり、今日では環境が一つのテーマになっている。他の

メーカーではいち早く環境対策に取り組み、車の軽量化や省資源をテーマにした。これが消費者の共感を呼んで販売台数を増やすという結果になった。今はつくられる消費者の共感が大きなポイントになった。この点、日産は出遅れたように思われる。

アサヒビールも一時低迷を続けていた。食事のあり方やビールに対する嗜好が変わっているにもかかわらず、従来のビールを生産していた。ところが、トップが交代することによって考え方も一変、脂っこい料理に合うようなビールの口当たりを軽くし、かつのど越しのいいものに転換することにした。当然、古いビールや生産ラインを捨て、新しいビールにかけなければならぬ。またビールは鮮度がいいとおいしいので、流通在庫の日数を短縮する努力を全社員が取り組んだ。社員一人ひとりが問題意識を持ったからこそ、アサヒビールは立ち直ったのである。

ものをつくるというのは、形や内容を企画するところから始まり、最後は消費者に買ってもらいたい満足してもらいたいことだから、正しく経営することだ。展示会に出かけるにしても、最終日に行くとどんな商品が売れたか、入場者はどれくらいか、どんなフィードバックをしているかなどをリサーチすることも大切。またユーザーが手ごころな価格だと思つたような、コストダウンの努力もしなければならぬ。そういう中で、消費者の共感を呼ぶような商品を企画していけば、売れるのではないかと感じる。



素材&技術

モノづくりの町・高岡を下から支えているのが、新しい素材や技術の開発。起業家精神に満ちあふれた技術者たちが日夜研究にいそしみ、新素材・新技術を生むべく努力している。ここではその基礎となる新しい素材や技術の開発動向をレポートする。

人に地球にやさしい鉛レス合金の開発

高岡銅器と鉛というコンビとごんないかもしれないが、銅合金にはある割合の鉛成分が含まれている。だが近年、鉛の毒性による人体への影響や環境汚染が問題化。確かに鉛は、融点が低く加工性に優れるため、電子基板のハンダや合金メッキなど、その用途も幅広い。しかし、破壊された製品から土壌に溶け出す危険性もあり、消耗品・量産品のメーカーを中心にリサイクルや代替素材へのシフトが進められている。現在のところ、銅製品において鉛の使用を制限する動きはないものの、将来の規制拡大も懸念されることから、高岡銅器でも新素材の研究・開発は緊急の課題といえよう。こうした時代の趨勢に応えるべく、高岡市デザイン・工芸センターの呼びかけにより「鉛レス素材開発研究会」が発足した。平成十一年七月二十一日には、高岡銅器の一四業者が集まり、鉛を含まない銅合金の実験が開始された。

ある。高岡銅器の主流は、銅八〇〜七〇%と亜鉛三〇〜四〇%に、約二%の鉛を加えたものだ。このうち、鉛に代わる成分として「スズ」「マンガン」「ビスマス」「シリコン」を配合。各合金の特性を従来のものと比較しながら分析する。鑄造実験では、生型鑄造法とシェルモールド鑄造法により試験用のテストピースをつくり、各合金の湯流れ粘度や膨張によるピンホール発生などを調べた。また、着色実験では、さまざまな着色法によって塗膜の表情や結晶の浮き出し方を比較。平成十二年一月現在では、まだ詳しい結果は出ていないが、青銅色の場合、すべての合金が従来と同質に仕上がることがわかった。この後、切削や強度などの実験を重ねながら、必要に応じて成分の配合を調整。鑄物素材としての完成度を高めていく。

研究結果は、高岡銅器の関係者をはじめ広く一般に公開。平成十二年度中には、研究結果やコストなどをトータルに検討しながら、「鉛レス合金」による新商品の開発を目指す。



切削実験により合金の加工性を分析



鑄型ばらし後のテストピース



鑄造実験の注湯工程



生型鑄造法の鑄型づくり

異素材を組み合わせた作品 キネティック・ライト・アート が誕生

キネティック・アート……。通常、芸術作品は静的なものだが、これに動きを加えたものをいう。そのキネティック・アートに光の要素を加味して製品化したものが、「オーロラ」をはじめとする動く明かりシリーズの三作品。素材のアルミ鑄物は高岡、和紙は八尾、ステンレスは東京や千葉、光ファイバーは栃木や静岡、そしてメカは東京や埼玉と、各地の素材により構成されている。

動く明かりシリーズは、伝統工芸高岡銅器振興協同組合とクラフト作家・志村雄逸さんのコラボレーションによってできたものであるが、同協同組合では、他素材との融合を評価。光ファイバーなどのハイテク技術と鑄物や和紙という伝統的な素材を組み合わせた新クラフト感覚の照明器具が誕生した。



写真左より「オーロラ」、「和の光彩」、「デュエット」

Information from 高岡市デザイン・工芸センター

伝統工芸産業の後継者育成 技術伝承講座

高岡市デザイン・工芸センターでは、自身の高岡市工芸デザイン指導所の事業を引き継ぎ、伝統工芸産業の後継者育成を目的とした養成スクールの一環として、短期の技術伝承講座を開催している。卓越した技術を有する著名な工芸作家を招聘し、講義や実習を通じて技術や専門知識の習得を図り、産地技術力の向上を目指す。



型押しの際の様子。半乾燥の型に模様を書いた和紙を張り、鑄で模様を浮き出させるように押していく。



指さすというものだ。平成十一年度の講師には、日本工芸会理事の根来茂昌さん(横浜市)を招いた。型押しとは、型で引いた鑄型が完全に乾燥する前に、鑄で押し模様をつける技法。高岡にも双型の技術は伝承されているものの、本格的な型押しは双型は受け継がれていない。

そこで、型押し双型では第一人者の根来さんを講師として講座を開催。高岡銅器の技法の幅を広げる狙いのもと、十月に四日間わたって催された。

講座の課題は「銅鑄づくし」。銅と錫の合金の一方を磨き上げて鑄に仕上げ、もう一方の面を型押しして模様を浮き立たせるというものである。

講座に参加した一〇名の受講生は、鑄・引き型づくり、鑄押し、石膏取り、鑄押し仕上げ、鑄造などの実習をこなしながら銅鑄づくりに取り組んだ。

伝統的工芸品 技術・技法継承者育成事業

高岡銅器・漆器の貴重な伝統的工芸品技術の継承のために、高岡市ではマンツーマンによる人材育成制度を実施。一定の資格を持つ育成者と継承者を審査委員会の審査・推薦のもとで市が決め、育成者には月五万円、継承者には同三万円を一年間、さらには材料購入費として年間一〇万円の補助金を交付して、伝統技術の継承を図っている。

育成者は、高岡市伝統工芸産業技術保持者や伝統工芸士。また継承者は高岡市が開講する伝統工芸産業技術者養成スクール修了生をはじめ、高岡短期大学産業工芸学科や美術系大学の関連学科の卒業生で、継承する伝統技術を生業とする意

平成12年度工芸体験実習開催予定

高岡市デザイン・工芸センターでは、平成12年度に下記の工芸体験実習を予定しています。諸事情により日程や内容が変更する場合がありますので、ホームページもしくはお電話にてご確認ください。

| ■親子体験実習(1回コース) 親子2名1組(子どもは小学3年生以上) | | |
|------------------------------------|----------------|-------------------|
| 日 | 程 | 内 容 |
| 金 | 平成12年 7月16日(日) | 鑄物でルームプレートをつくる |
| 金 | // 8月20日(日) | 鑄物で時計をつくる |
| 漆 | // 7月23日(日) | 塗りでマイカップをつくる |
| 漆 | // 8月6日(日) | 螺鈿で石のペーパーウエイトをつくる |

| ■市民体験実習(1回コース) 15歳以上の一般 | | |
|-------------------------|----------------|------------------|
| 日 | 程 | 内 容 |
| 金 | 平成12年 5月21日(日) | 鑄物でフォースタンドをつくる |
| 金 | // 12月3日(日) | 鑄物でキャンドルスタンドをつくる |
| 漆 | 平成13年 2月18日(日) | 鑄物で時計をつくる |
| 漆 | 平成12年 5月28日(日) | 蒔絵で手鏡をつくる |
| 漆 | // 12月10日(日) | 蒔絵で羽子板をつくる |
| 漆 | 平成13年 2月11日(日) | 蒔絵で雛人形をつくる |

| ■市民工芸実習(4回コース) 15歳以上の一般・経験者 | | |
|-----------------------------|-------------------|--------------|
| 日 | 程 | 内 容 |
| 金 | 平成12年11月10日からの毎金曜 | 蠟型による小物制作 |
| 金 | 平成13年3月2日からの毎金曜 | 鑄造で皿をつくる |
| 漆 | 平成12年6月9日からの毎金曜 | 変塗・蒔絵による器制作 |
| 漆 | // 12月1日からの毎金曜 | 変塗のマット・椀・蓋制作 |

(注)11月10日からの「蠟型による小物制作」の4回目は11月30日(木)の予定です。

高岡市デザイン・工芸センター
〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0520 FAX.0766-62-0521
http://www.suncenter.co.jp/takaoka/